

上野殿 御返事

四〇三 三大祕法稟承事

夫法華經第七神力品云、以要言之、如來一切所有之法、如來一切自在神力、如來一切、
 祕要之藏、如來一切甚深之事、皆於此經宣示顯說等云云。釋云、經中要說要在四事等
 云云。

問、所說要言之法者、何物耶。答云、夫釋尊初成道の初より四味三教、乃至法華經の廣
 開三顯一の席を立て、略開近顯遠を說せ給し涌出品まで、祕せさせ給、實相證得の當初
 修行し給し處の壽量品の本尊と戒壇と題目の五字也。教主釋尊、此祕法をば三世に
 無隱普賢・文殊等にも讓給はず。況や其以下をや。されば此祕法を說せ給し儀式は、
 四味三教竝に法華經の迹門十四品に異なりき。所居の土は寂光本有國土也。能居の
 教主は本有無作の三身也。所化以て同體也。かゝる砌なれば久遠稱揚の本眷屬上

【系年】弘安四年四月八日(60) 【寫】觀師本 京都本法寺藏 【刊】外
 152, 遺 30, 縮 2051 【註】徹下, 考 5, 9

①說十(以)② ②〔云〕一③ ③〔經〕一④ ④〔處〕一實⑤ ⑤し=ふ⑥
 ⑥〔能居の〕一⑦

行等の四菩薩を、寂光大地の底よりはるばると召出して付屬し給。道暹律師云、由法是久成之法。故付久成之人等云云。問云、其所屬の法門、於佛滅後、何時可弘通給乎。答云、經第七藥王品云、後五百歲中、廣宣流布於閻浮提、無令斷絕等云云。謹奉拜見經文、佛滅後正像二千年過て、第五の五百歲鬪諍堅固白法隱沒時云云。問云、夫諸佛の慈悲は如天月、機縁の水澄ば利生の影を普く萬機の水に移し給べき處に、正像末の三時の中に末法に限ると説給は、於教主釋尊慈悲偏頗あるに似たり如何。答、諸佛の和光利物の月影は雖照九法界閻、謗法一闡提の濁水には不移影。正法一千年の機の前には唯小乘權大乘相叶へり。像法一千年には法華經迹門機感相應せり。末法の始の五百年には法華經の本門前後十三品を置いて、只壽量品一品を弘通すべき時也。機法相應せり。今此本門壽量の一品は像法の後の五百歲、機尚不堪。況や始の五百年をや。何況や正法の機は迹門尙日淺し。増して本門をや。入末法、爾前迹門は全出離生死の法にあらず。但專限本門壽量一品出離生死の要法也。以是思に、於諸佛化導全無偏頗等云云。問、佛滅後於正像末三時、本化迹化の各々の付屬分明也。但限壽量一品末法濁惡の衆生の爲なりといへる經文未分明。慥に經の現

①[はるばると]一圓 ②③④[云]一圓 ⑤[普く]一圓 ⑥し給=す圓 ⑦限ると説き給は=限て説玉はば圓 ⑧の=に入て圓